ブレーメン

ウェル

商店街の回廊は仄暗く、天窓から差す光も皆無だ。

道の両側に居並ぶ商店はどれもシャッターが降りていて、覗くことも叶わない。天井には時折蛍光灯が這っているが、電力の供給が不十分なのだろう。切れかかって、モールス信号のような明滅を繰り返している。

奥に進むにつれて光は薄れ、闇が蔓延る。

その上、ここには不可視の存在が幾つも蠢いている。マルコフは「宇宙人ナノ。害ハ特ニナイノ」と言っていたが、リーヴィアは未だに半信半疑だった。

リーヴィアは、先導するマルコフとはぐれないよう、駆け足で付いていく。聖導衣と呼ばれる白い服に、桜色のスカート。癖だらけの萌葱色の髪には、天秤を模った髪飾りが付いている。

リーヴィアは方向音痴を極めており、すぐ迷子になる。だから、この場所に於いてはマルコフだけが頼りだ。

「エエト……タシカ、コッチダッタハズナノ」

マルコフはこの場所を熟知しているようで、入り組んだ道も迷うことなく進んでいく。身長は一メートル足らずと小柄で、歩くたびにひょこひょこと揺れる狐耳が特徴的だ。

それに狐色の髪をしているが、べつに彼女が狐というわけはない。左腕に付けているのは、ペンローズの三角形だろうか。

切れかかった蛍光灯も、マルコフが近づくだけで忽ち光を取り戻す。

電子精霊。リーヴィアはその言葉を心中で反芻した。

不意に、マルコフが立ち止まった。商店街の一角、路地裏へと続く細道の前で。

「ココカラ先ハ、時空ガ歪ンデイルノ……間違イナイ、ココナノ」

そもそもこの商店街――『旧六条商店街跡』自体、重力と年月によってあらゆる法則が歪められた異形の世界なのだが、マルコフが示す場所は、さらに歪だった。

それもそのはず、この先は――異世界と通ずるエリアなのだ。

生唾を飲み込んだリーヴィアの細い喉が鳴る。

「ココヲ真ッスグ行クト、扉ガアルノ。折角ダカラ赤イ扉ヲ選ブト、異世界ヘ行ケルハズナノ」

マルコフの言葉に、リーヴィアは小さく頷いた。

生まれ故郷を去り、時空を彷徨って辿り着いたこの世界。ニヘクラ騎士団の団長代理を務めるマルコフたちに保護され、早四ヶ月が経とうとしていた。

大勢の仲間がいた。幾度となく大乱戦に出場して、時には喜び、時には悔し涙を流した。一つ一つの感情の、いったいどれほどを共有出来ただろう。それを知る術は、もはやなくなってしまった。

「ソレジャ、リーヴィアチャン。達者デナノ！　マタイツデモ、ニヘイ堂ニ遊ビニ来テ欲シイナノー」

無邪気に笑うマルコフ。

「マルコフちゃん、ありがとう」
リーヴィアはその場にかがみ、小さくも頼もしかったマルコフの体躯を抱きしめた。
「ナ、ナノー？」と声をあげるマルコフが、また愛しい。
抱擁を解き、振り返る。薄暗闇が支配する細道を、リーヴィアは毅然とした瞳で見据えた。
ここから先は、一人で行かなければならない。そして、自分の居場所は自分で探さなければならないのだ。自分を必要としてくれる場所を――。
心中に浮かんだ一抹の寂しさを振り払うように、リーヴィアは一歩を踏み出した。
彼女はもう、振り返ることはなかった。

◇　◇　◇

「赤い……扉？」
リーヴィアは首を傾げた。腰まで伸びた長い髪が、風にそよぐ草花のようにふわりと揺れる。
突き当たりまで進んだリーヴィアが目にしたのは、こげ茶色の扉。拡大解釈をすれば、赤い扉に見えなくもない……気がした。
とりあえず開けてみよう――そう思い、ドアノブを引くが、びくともしない。押してみても結果は変わらない。どうやら施錠されているらしい。
「でも確かに、異世界と繋がっているんだったら、鍵を掛けておかないと危ないし……」
一人で合点のいくリーヴィア。しかし、扉が開かないのでは、どうしようもない。こういうときは、とリーヴィアは考える。やはり、精霊の力を借りるしかない。
リーヴィアは、腰に提げていた巾着袋から精霊石を取り出す。トパーズにも似た色合いの石を彼女はしばらく見つめ――、
「……お願い、ホーリーちゃん」
――おもむろに口付けをした。
瞬間、辺りに突風が吹き荒れ、路地裏の室外機が激しい物音を鳴らした。小さな部品が、幾つも地面を滑っていく。
そして砂塵の中、聖義の精霊ホーリーは具現化を果たした。黒いロングコートに身を包んだ朱色ツインテールの少女が、いつの間にかリーヴィアの傍らに屹立している。
「……ずいぶん埃ッぽいところだな。ンで、どうした」
ホーリーは周囲を見渡し、退屈そうに欠伸をする。リーヴィアはかいつまんで事情を説明した。
「……へえ。つまり、この扉がマルコフの言っていた赤い扉である確証はなく、糅てて加えて施錠されている、と」
リーヴィアは三度、四度頷く。その様はまるで子犬か何かのようだ。
なら、とホーリーは口の端を吊り上げて笑う。
「――簡単なことさ」

ホーリーはどこからともかくオーステナイトの鎖を取り出し、ドアノブに絡ませた。そして、思い切り――

「要するに、力尽くで開ければいいんだろ？」

――ぶち抜いた。

開け放たれた扉から、けたたましいアラームが乱反射して鳴りはためく。同時に、魁偉な機械が作動する音。それぞれが、リーヴィアの聴覚を激しく揺さぶる。

「わあぁぁ……すごいぃ騒音です……」リーヴィアは両手で両耳を塞いでいる。

「ンなこと言ッてる場合か！」

ホーリーはリーヴィアを肩に担ぐと、扉の中へと駆けこんだ。ますます機械音がリーヴィアの耳を苛む。

「わあぁぁぁぁ……」

T字の部屋だ。右手には、出口らしき穴が眩い光を放っている。

そして左手には――。

「わ、あれ、機械生命です！」

「チッ、こんなところに巣食ッていたわけか！」

機械生命――。何かを護る番人で、護っている対象に誰かが近づくと、容赦なく襲い掛かってくる存在だ。

今回の機械生命は、全長が優に十メートルは超えている。まともにやり合えば、命はないだろう。

「コイツ……異世界への出口を護っている可能性があるな……」

ホーリーはリーヴィアを出口に続く道へと押しやると、自身は機械生命と相対した。何本もの鎖が機械生命に絡みつき、その起動を妨害している。

「さっさと行きな。アンタがこの世界から消えれば、あたしも勝手に消える」

「ホーリーちゃん……」

逡巡している時間は、数瞬たりともなかった。自分が留まれば留まるほど、ホーリーの負担は増えるのだ。

振り返らず、駆けだした。

ホーリーは薄く笑みを浮かべていた。

――そうだ、その決断力こそが、今までアンタに欠けていたものだ。ニヘイ堂とやらで、ちょっとは鍛えられたらしい。

ホーリーと言えど、機械生命をいつまでも抑えてはいられない。

多重の鎖を引きちぎった機械生命が、咆哮にも似た金属音を奏でた。

「油注せってんだ、チクショウ！」

鼓膜が破裂しそうな音に顔を顰めながら、彼我を分かつように鎖を生成していく。即席の壁だが、あの巨躯相手では数秒と保たないだろう。

地響きを起こしながら、機械生命はゆっくりと迫る。動きは鈍重だが、如何せんデカい。一歩が大きい。

ホーリーの鎖壁は、機械生命が触れた瞬間、紙切れのように容易く破れた。

「マジかよ！」

絶句する。せめて数秒は、と思っていたのに。
後方を確認する。リーヴィアは既に出口まで肉薄している。あと五秒も耐えれば、この場からおさらばできる。
刹那、機械生命が右のストレートパンチをお見舞いしてきた。咄嗟に鎖を天井に突き刺し、縮めることで空中への回避行動を取った。一拍子前までホーリーが立っていた場所は、バラが咲いたように地面がえぐれている。
「……ウソだろ」
鎖に捕まりぶら下がるホーリーに、機械生命の双肩に取り付けられていた銃口が光る。合わせて十六門はあるだろうか、それが一斉に火を吹いた。
それは面への射撃だった。ホーリーには最早避ける術はない。銃弾はホーリーの全身を貫いていく。ホーリーは顔を歪めた。
「……あぶねェ」
ホーリーの身体は薄く透けている。具現化が解けたのだ。もはや実体を持たないホーリーの身体を、幾ら銃弾が貫こうとダメージはない。光を撃つようなものだからだ。
息を吐く。次の瞬間、ホーリーの残像も消え去った。

◇　◇　◇

後方で闘うホーリーに胸中でエールを送りながら、リーヴィアは光の中へと飛び込んだ。
迸る閃光の奔流を突き抜けた先で、鮮やかな緑青の世界がリーヴィアを迎え入れる。
巨木の天辺付近にぽっかり空いた大穴から吐き出されたリーヴィアは、そのまま重力に従って落下していく。
「わ、わああっ！」
地面が加速度的に近づいてくる。リーヴィアは恐怖のあまり、目を瞑った。
しかし、彼女が予期したような落下の衝撃は、ついになかった。それればかりか、わたあめのような心地よい感触が波紋のように全身を伝わる。
恐る恐る目を開くと、巨大な白い生き物がクッションになって、リーヴィアの身体を受け止めていた。
「……ト、トロロ？」
リーヴィアは、昔読んだ絵本に出てきた、架空の生き物を思い浮かべた。しかし、この生物はトロロと似ても似つかない。
そもそもここはどこなのだろう、と周囲の様子を窺った。
どうにも森林のようだ。木漏れ日が温かく、思わずお昼寝したくなってしまう。
少しだけ、眠っちゃおうかな。ふかふかで気持ちいいし。
とろんとした瞼は、少しずつ閉じていく――。
その時、視界の端に見たことのない色彩が映って、彼女の眠気は一気に吹き飛んだ。
それは、すよすよと木の幹に背中を預けて寝息を立てる少女。お

よそこの世のものとは思えない色調のツインテール。
「わぁ……」
　極彩色……いや、虹色とでも言うべきだろうか。ありとあらゆる色彩を並べたような髪に、リーヴィアは呆けたように口を半開きにして、魅入ってしまう。
　すると、視線を感じたのだろうか。虹色の少女は瞼を擦りながら、片腕で小さく伸びをした。腰まで伸びるツインテールが、意思でも持っているかのように不規則に動く。どうやら、眠りから覚めたらしい。
　そして、虹色の瞳と萌葱色の瞳が、交差する。
「……あ、あの、あなたは？」
　白い生物の上に乗っかったままのリーヴィアが、掠れた声でそう尋ねた。
「……るる、のこと？」と答えた少女の目が、少しだけ細められる。リーヴィアではなく、その下敷きになっている物体が気になっているようだ。
「あらまきを、いじめちゃ、だめ、だよ」
「あら、まき……？」
　リーヴィアは不思議そうに首を傾げる。あらまきとは、いったいなんだろう？
　クルールは怯懦な表情を浮かべて、リーヴィアに乗っかられている物体を指さした。「あらまき、つぶれちゃう……」
　その言葉でリーヴィアは、自身の下敷きになっている生物が『あらまき』なのだということに気が付いた。
「わ、わ、ごめんなさいっ！」
　慌てて飛び起きると、あらまきは先ほどまでの大きさが嘘のように、クッションサイズまで収縮した。
　クルールはツインテールを伸ばして、あらまきを胸元まで引き寄せる。そして大切そうに抱えると、「あなたは、だれ？」と問うた。
「あの、私、リーヴィアです。よろしくね、るるちゃん」
　クルールは、拳状の髪の毛を差し出す。どうやら、握手がしたいらしい。
「あたらしい、おともだち」
　クルールは少しだけ嬉しそうに、口元に手を当てて笑う。その様子を見て、リーヴィアも嬉しくなった。
　髪の毛と握手という初体験を済ませた後、リーヴィアは今後どうしようかと思案した。
　まずは、人里を見つけなければならないだろう。
「るるちゃん、どこかに町とかないかなぁ？」
「まち、むるむるの、こと？」
「ムルムル……？」
　町の名前だろうか、とリーヴィアは首を傾げる。
「あっちに、いんでぃご、いるよ」
　クルールはあらまきを抱いたまま歩き始める。土地勘のないリーヴィアは、迷子にならないよう、急いで彼女の背を追った。
　五分ほど木立を進むと、不意に拓けた場所に辿り着いた。森林を

抜けたわけではない。その一帯だけ、樹木が切り株と化しているだけだ。そして、蒼いサーコートに身を包んだ銀髪の青年が、斧で木を斬り付けていた。

「いんでぃご、あのね……むるむるに、いきたいの」

インディゴと呼ばれた男は、こちらに背を向けたまま振り返らない。どうやら伐採に集中しているらしい。

「るる、もう少し待っていてくれ。あと数発で、丸太が手に入るんだ」

「木こり……さん？」

それが、リーヴィアの抱いた第一印象だった。

リーヴィアの呟く声を聞いて、インディゴはようやくこちらを振り返った。

「――貴様、誰だ」

先ほどまでとは打って変わって、氷のように鋭く、冷たい声色だ。クルールに仇なす存在か否か、警戒しているようだった。さしもの鈍感なリーヴィアも、殺気に中てられて後ずさってしまう。

「りーゔぃあ、るるのおともだち、だよ。むるむる、いきたいの」

クルールが、インディゴを宥めるようにそう言ってくれた。

インディゴは顎に手をやり、しばらく考えるそぶりを見せる。

「……リーヴィアとやら。貴様、どこから来た？」

「えっと」旧六条商店街跡、と言っても通じなさそうだ。「ニヘクラ騎士団ってわかりますか？」

「ニヘクラ騎士団、だと？」

ふっ、とインディゴは息を吐く。声色も、目の鋭さも、先ほどと比べるとだいぶ和らいでいる。

どうやら、彼の警戒心は氷解したらしい。

「マルコフのところの者か。ならば無碍には扱えんな。付いてこい、町まで案内してやる」

そういうと、彼は斧――変形して剣に変わった――を鞘に収めた。

インディゴは南に向かって歩き出す。

ちょうどお腹も空きそうな、そんな昼下がりだった。

半刻ほども歩くと、森林を抜けることができた。

この辺りは軽い高台になっているのか、遠く見えるムルムルの街並みを一望できる。

周囲には草原がどこまでも広がっており、畦道が伸びている。その途上に木製のテーブルが一つ。囲うように、三つの人影がベンチに腰かけている。

「あら、リーダーにクルールちゃんじゃない。奇遇ね」

「む、ミシカか」

声を掛けてきた女性――体躯は人形のように華奢、それでいてどこか大人びた雰囲気を漂わせている――が立ち上がり、手招きをする。

ミシカの紅と蒼のオッドアイが、リーヴィアを見つめた。

「貴女のことは、初めて見るわ」

「は、はじめまして、リーヴィアです！」

大袈裟な所作でお辞儀をする。ミシカは柔和な笑みを浮かべて、「よろしくね」と言った。
「それで、だ。ミシカ。こいつらはいったい何者だ？」
インディゴは、ミシカと同席していた二人組を顎で示し、怪訝な顔を浮かべている。
――インディゴさん、初対面の方には容赦ないなあ。とリーヴィアは思った。
彼の言葉に真っ先に反応を示したのは、黒い箱の顔を持つ機械だった。
《こいつら、とは随分なご挨拶だな。騎士殿》
「あ、おい。今日はもうバッテリーの残量が少ないんだ。喧嘩とかすんなよ」
隣に座る、紅桔梗色の髪の少年が慌てて口を挟む。
否、格好や喋り方は男寄りだが、実際の性別は不明だ。
《結鶴、俺はそこまで喧嘩っ早くない。……なに、騎士殿。そこのお嬢様から『お茶をご一緒如何？』と誘われてね。紳士たるもの、レディからの誘いを断るわけにはいかないだろう？》
おどけたように答える黒箱に、インディゴはますます眉間の皺を寄せる。結鶴と呼ばれた少年は、「まったくこいつは……」というふうに、額に手を突いた。
ミシカが苦笑しながら、場の収拾に努める。
「リーダー、彼らは私から誘ったのよ。最初は某夫婦を誘おうと思っていたのだけど、旅行に行ってしまったみたいで。ご一緒できる方を探していたの」
《そこの大怪盗様がコレクトしている、世にも珍しい鉱石を見せてもらおうと思ってな》
飄々とそう言ってのける黒箱。
大怪盗様、という単語を聞いて、リーヴィアは羨望の眼差しをミシカに注ぐが、誰も気づいていないようだ。
ちょっとした緊張状態は、クルールの「るる、おなかすいた」という呟きによって解かれた。リーヴィアも、しばらく何も食べていないことを思い出す。
「さっきパン屋に寄ってきたの。たくさんあるから、皆でお昼にしましょう？」
ミシカはおもむろにバスケット籠の蓋を開ける。そこには、黄金色のパンが、ぎゅうぎゅうに詰まっていて……。
「……クイニーアマンがある！」
リーヴィアの目がぱっと輝く。クイニーアマンは、彼女の大好物なのだ。よだれが垂れてきそうだった。その様子をミシカは微笑ましく見守っている。
「どうぞ、遠慮しないで食べて？」
「えっ、いいんですか？」
この場にマルコフがいれば、「オカワリモアルナノ！」と言いそうだ。
それから六人はランチタイムを楽しんだ。インディゴは終始、「良い小麦を使っているな……」などと呟いていた。きっと木こり

兼農家なのだろう。
　クルールは無邪気にパンを頬張り、時折ミシカが彼女の口元を布巾で拭いていた。見た目はまったく違うが、その様子は姉妹のように思えた。
　結鶴はクロワッサンを頬張りながら、黒箱に「お前は食うなよ。掃除が大変だから」と釘を刺している。
　この賑やかな様子に、リーヴィアはニヘイ堂での食事風景を思い出して少しだけ寂しくなった。この町で居場所を見つけることができるだろうか、という不安も去来する。
　バスケットの中身はみるみるうちに減っていき、黒箱を除いて皆が満腹になっていた。
《結鶴、帰ったら俺にもイエローケーキとか食わせてくれよ》
「んなもんあるか！」
　結鶴と黒箱は自分たちの拠点を持っており、そこに幾人かの少年少女が集まっているらしかった。
　また、インディゴやミシカ、クルールにも共同で住む家がある。誰しもが生活の基盤がある。当然のことだった。
「さて、リーヴィアはムルムルを目指しているんだったな。道草を食ってしまったが、向かうとしよう」
　インディゴが立ち上がると、各々がそれに追随した。
　三十分も歩くと、ムルムルは目前となった。賑やかな街の喧騒が聞こえてくる。これからどんな生活が待っているのだろう。
　不安もあるが、それ以上に期待に胸が高鳴るのをリーヴィアは感じた。そのときだった。
　ズドン、と大地が揺れた。
「……地震、ではなさそうね」
　ミシカはすぐに口を噤んだ。彼女は森の方角を、険しい表情で見ている。木々の隙間から吐き出される硝煙。
　その中から、姿を現したのは――。
「機械、生命……」
　リーヴィアが青い顔をして、呟く。世界を超えてなお、彼女を追いかけてきたのだ。
「なんだ、こいつは……？」
　呟きながら、インディゴは刃先が星形になったツバイハンダーを引き抜く。
　機械生命――二足歩行ロボットは、双肩と一体化したサブマシンガンをこちらへ向け――乱射してきた。
「伏せろッ！」
　インディゴが叫ぶ。無数の弾丸が撃ち込まれ、あちこちで火花が弾けた。
　土埃が晴れる頃、リーヴィアは恐る恐る顔をあげた。全員が伏せている中、ただ一人、仁王立ちしている男がいる。
《――やれやれ、どうやら面倒なことになったみたいだな？》
　黒箱はすべての銃弾を弾き、なお余裕の態度を見せていた。
「……ほう」
　インディゴが「なかなかやるな」というように息を洩らす。

《これでも敏捷壁なのでね。防御に関しては任せてくれて構わ――》
再度、散弾が周囲を襲う。だが、今度は誰も伏せようとはしない。黒箱が軽やかな身のこなしで、全ての銃弾を明後日の方向へ弾き飛ばしていくことが分かったからだ。無駄一つない鮮やかな所作。芸術的な美しささえ感じさせる。
「よし、壁役は黒箱に一任するとして、俺たちはさっさとあのオンボロ兵器をスクラップにするぞ。絶対に街まで到達させるな」
インディゴの言葉にミシカとクルールが頷く。
ただ一人、結鶴だけが青ざめた表情をしていた。
「……まずい、そんな派手に動いたら」
結鶴がそう溢したのと同時に――。
《――――!》
これまで韋駄天の如くアクロバティックな動きを見せていた黒箱が、糸の切れた操り人形のように動きを止めた。眼光が掻き消え、その場に立ち尽くしている。
「あーっ！　アイツ、やっぱりバッテリーが！」
結鶴が慌てて駆け寄るが、機械生命の砲塔は猛然と火を吹くのを止めない。黒箱の左の眼孔が破損し、罅割れが蜘蛛の巣のように広がった。
このままでは、結鶴もろとも消し炭になってしまう。
――そのとき、上空に文字が浮かび上がった。

死　に　た　い

機械生命はその文字に引き寄せられるように、標準を天高く合わせた。そして対空砲のように銃弾を吐き出していく。
「ナノ～！」
空から、マルコフが降ってくる。銃弾を幾つかその身に受けながらも、仲間のもとへ着地を試みている。数瞬後、体操選手のように華麗な着地を得意げな顔で決めた。
「マルコフちゃん！」
「無理ヤリ世界間渡航シテ来タナノ！　アノ機械生命、ロストナンバーズニ狂ワサレテイルノ！　コノママ町ヲ破壊スルツモリナノ！」
「なんだと……？」
インディゴが表情を歪めた。それだけは絶対に阻止しなければならないという想いが、表情から伝わる。
「町ノ防災無線ヲハッキングシテ、呟伽羅達ニ非難ノ誘導ヲオ願イシタナノ！　今、ロマン仮面ヲ中心ニ避難誘導ガ、クラトスサン中心ニ防衛線ノ形成ガ進ンデイルノ！」
いずれも名うての呟伽羅達だった。日頃からチームを組んでいる者達もいれば、そうでない者もいる。しかし、ムルムルを守るという共通の目的があれば、幾らでも力を合わせることができる。
「トニカク、ワタシガヘイトヲノ稼グカラ、キュキュット綺麗ニ倒シテ来テ欲シイノ！」
マルコフの言葉に、各々が頷く。結鶴だけは、深刻な表情で黒箱の状態をチェックしている。
「行くぞ、ミシカ、クルール。反撃だ」

マルコフが正面から相対する中、他の三名は斜めから切り込んでいく。
「悪イケド……ココカラ先ハ、一方通行ナノ！」
Keep outと書かれたテープが、機械生命と町を断つように伸びていく。伸縮性のあるテープだ。機械生命でもそうそう突破できる代物ではなかった。
機械生命の猛攻を、マルコフは一身に集めている。黒箱と比べて、被弾は多い。回避力だけでなく、耐久力でも勝負するのがマルコフだった。
「私も、戦わなきゃ……！　お願い、アイラちゃん！」
リーヴィアも、星空の精霊アイラを呼び出す。幼い外見の少女が、宙にふわふわ浮かんでいた。夜空色の髪が空に靡いている。
「お任せなのです、リーヴィアちゃん！」
アイラは時間の操作を得意としている。
今回の場合、マルコフの傷を遡行させることで、ダメージ自体をなかったことにできる。或いは逆に、自己修復能力を高めることで瞬時に治療することも可能だった。
「アイラチャン、アリガトナノ～」
「マルコフちゃん、ふぁいとなのです！」
二人の精霊は気が合うのか、コミュニケーションを取りながら戦っている。余裕が窺えた。
その間に、インディゴたち三人が、猛攻を仕掛けていく。鈍重な機械生命に次々と攻撃はヒットし、麻痺が蓄積していく。しかし――。
「――アイギス、かしら？」
一旦機械生命から距離を取り、息を整えながらミシカが呟いた。幾ら攻撃を加えても、機械生命自体に損傷はないようだった。機械生命は緑色の薄膜を纏っており、破っても高速でリチャージされるのだ。
『オートプロテクション』――ナノ」砲弾を受け止めながら、マルコフはそう言った。「自動デリチャージサレルアイギスナノ」
「自動――だと？」
インディゴの表情が曇った。現状、この三人に盾を貫通させる術はない。否、三人だけではない。マルコフやリーヴィアにも、そのようなスキルはなかった。
「リーダー、まずいわ！」
至近距離でさく裂した榴弾を躱しつつ、ミシカが機械生命を指さした。少しずつだが着実に、機体は大きさを増している。
「アイギスに飽き足らず、命脈持ち……だと？」
どれだけ攻撃を加えても、麻痺を蓄積させても、この機械生命を突破することはできない。
了然たる事実が、絶望として襲い掛かる。
「……ッ、ひとまず撤退だ。ムルムル市で他の呟伽羅の助けを借りよう」
インディゴが発したそれは、苦渋の決断だった。町まで撤退すれば、あの機械生命は必ず町を攻撃し始めるだろう。
「くそっ、アンタさえしっかりしてれば、あんな盾……」

結鶴が悔しそうに黒箱のボディを叩いた。しかし、動力が枯渇した黒箱は、何も語ることができない。意識すらないのだろう。
しかし、結鶴の言葉は裏を返せば――。
「――結弦さん。黒箱さんには、あの盾を打開する方法が、あるのね？」
いつの間にか前線から戻ってきたミシカが、そう問う。
結鶴は、小さく、しかし確信を以て頷いた。
「マルコフちゃん、ワタナベドライブを黒箱さんにお願いするわ」
「ワ、分カッタナノ！　デモ、ソシタラ誰ガ壁ヲ――」
マルコフは他のメンバーを護るのに全霊を傾けている。とてもワタナベドライブを使う暇はなかった。
「しばらくなら、私が！　お願い、ピュア様！」
マルコフの代わりを買って出たのは、あろうことかリーヴィアだった。
彼女は本来なら壁役を買って出れるほど、アイギスを連発できるわけではない。それでも、マルコフがほぼすべての攻撃を集めてくれていたおかげで、盾を補充する時間は十二分にあった。
リーヴィアの傍らに現れた、純白の精霊ピュアは静かに唱える。
「――四十八の無垢よ、純白を護る盾となれ」
五十枚近い、結晶の盾が一斉に展開される。
その様子を見届けたマルコフは小さく頷き、スキルを発動する。
「黒箱サン、大丈夫？　充電スル？」
マルコフから無数のケーブルが伸び、全てが黒箱へと吸い込まれていく。
「急速充電、開始ナノ！」
機械生命も、何かを感じ取ったのか、攻撃の手を強め始める。結晶の盾は、あっという間にその数を減らしていく。
すかさず、インディゴがリーヴィアの前へ飛び出る。
「正念場だ、持ち堪えるぞ！　波浄剣！」
「行くわ、ハレルヤ！」
前面に出たインディゴが、銃弾を叩き落としていく。被弾も多いが、ミシカの治癒で、ギリギリ保っている。
そして――。
《――ずいぶんと長く、待たせてしまったようだな》
マルコフから伸びたケーブルに繋がれた黒箱が、すっくと立ちあがる。
「まったくだ。さて、一仕事するよ！」
ギリギリまで黒箱の修理をしていた結鶴が、黒箱の背中を叩いた。
《機械生命――。なかなかに肥大化したな。……なに、恐れることはない。少々データを改竄するだけだ》
黒箱は片手を機械生命に向けて差し出した。瞬間、機械生命に紫色の電流が迸り、その機体はみるみるうちに縮小されていく。そして緑色の薄膜も、忽然と消えた。
「情報ヲ、トリコンデイルノ……」
「なにはともあれ、これで俺たちの攻撃を遮るものはいなくなったというわけだ」

インディゴは得物を、クルールは髪の毛をそれぞれ構える。
呼応するように、ミシカが両腕を広げた。
「ブルーライン！」
透き通った青色の光が、シルクのように辺りを漂う。光を受けたインディゴとクルールは、淡い水色の光を纏った。
しかし、そこで易々とやられるのを待つ相手ではなかった。
倒れ伏した機械生命の背中に背負われた、レーザー砲。それが、ミシカに向けて発射されたのだ。
「ミシカッ！」
インディゴが振り返り、叫ぶ。マルコフが、咄嗟に一歩を踏み出す。普段は一分の隙も見せないさしものミシカでも、ブルーラインという最上位スキルを使った後では無防備を晒してしまう。
大人びた雰囲気とは裏腹に、その華奢な身体はあまりにも脆かった。レーザーの直撃を喰らった彼女の左半身は、塵も残さず吹き飛んでしまう。
見開かれた、深蒼の瞳。
透き通ったその瞳から、ふっと光が消えた。
「ミシカサン！」
くず折れるミシカに駆け寄るマルコフ、その目の前で、ミシカの身体は大量の宝石に変わった。
「ワッ！」
目を丸くするマルコフ。その頭上を、ミシカは悠々と飛んでいた。
そして、自身の唇に指先をあてがう。
「ふふ、やられたと思ったかしら？」
「ミシカさん、もうダメかと思っちゃいました……」
半身が消し飛ぶという、ショッキングな光景を極力思い出さないようにしながら、リーヴィアは呟いた。
「あらあら、私は怪盗よ？」ミシカは不敵に笑う。「怪盗たる者、奥の手は最後まで隠しておくものでしょう？」
「ふっ……よし、一気に決めるぞ、ルル！　フォーマルハウト！！」
青い光に包まれたインディゴの剣先が、天を穿つ。天蓋が砕け、禍々しい宇宙が姿を現す。そして、茫漠なエネルギーが機械生命に降り注ぎ、フレームを溶かしていく。
そして、現れたのは機械生命の核。
「……ごめんね」
クルールは、静かにそう囁いて、
――赤色の宝石が、温かい光を放った。

今回の一件で働いた呟伽羅達と共に『戦勝春のパン祭り』を終えると、インディゴ、クルール、ミシカは山の小屋へ、マルコフはニヘイ堂へ、そして結鶴と黒箱も、自分たちの居場所へ、それぞれの帰路についた。
ミシカは、余ったパンの入ったバスケットを、リーヴィアにプレゼントしてくれた。
リーヴィアは、これからのことを考えた。皆の助けを借りて、町ま

で辿り着いた。まずは、泊まるところを探さなければならない。
町を彷徨い歩き、彼女はいつの間にか公園に辿り着いていた。初めて会ったとき、クルールがそうしていたように、隅の木に背中を預けて座る。
いつの間にか、星が頭上で瞬いている。紺色の星空は、しかし旧六条商店街跡の天井よりも明るく見える。
代わりに、少しだけ肌寒い。
微睡む。兎を追って穴に落ちた少女のように、深い深い眠りに落ちていく――。
頬を、誰かの手のひらが触れた。
「――おい」
微かに目を開く。霞んだ視界に映ったのは、怪訝な表情をした結鶴の姿だった。
「結鶴……ちゃん？」
半分寝ぼけているリーヴィアがそう呟くと、結鶴は顔を真っ赤にして叫んだ。
「お、おおおおおおおい、誰が結鶴『ちゃん』だ！　オレのことをちゃん付けするな」
その慌てっぷりがおかしくて、リーヴィアは口元に手を当てて、くすくす笑う。
「……ったくアンタ、こんなところで寝てたら、凍死するよ」
結鶴は踵を返し、公園の出口に向かって歩き始める。
「どうせ行く当てがないんだろ？　なら、ウチに来ればいい。ちょうどヒーラーが欲しかったんだ」
その言葉を聞いて――リーヴィアはパッと明るい表情を見せる。
そして、慌てて結鶴の後を追いかけた。
結鶴は、天を仰ぎ、「これじゃあ、まるで迷子センターだ」と言って笑った。

ＦＩＮ